随想

感動と希望を与えた演奏

ベートーベン音楽祭

田幸正邦

東京有楽町の国際フォーラムで（5月4～6日）、感動のベートーベン音楽祭―生誕250年記念の音楽祭が、3会場で並行して行われた。コロナ禍により中止されていたものである。

朝一番の「0才からのコンサート」が際立った！　夫婦が乳母車や肩掛けを持ち合い、子どもたちと会場に進む情景が美しく、感動を覚えた。また、幼小中学生が目立った。つえを持つ年配者や障がい者も多く、3日間を通して女性が多く、全公演のチケットは完売であった。

最後の三つのピアノソナタ（第30～32番）がアンヌ・ケフェレック（フランス）によって演奏された（解説付き）。ベートーベンの意図や姿を洞察すれば、迷いを払拭できる、と感じた。ラーマン・エル・バシャ（フランス）は熱情、ワルトシュタイン、テンペスト、ピアノ協奏曲第5番「皇帝」などを弾いた。数年前に32曲の全ソナタを奏破して驚かせたが、神経質なタッチと音色がベートーベンの姿を曇らせた。

三ツ橋敬子指揮（本県で、数年前に第九を演奏）による田園交響曲（東京交響楽団）は、描写音楽を追究した成果が随所に認められ、感動を与えた。これは、女性特有の感性が反映したものであろう。第九交響曲「合唱付き」では、神奈川フィルハーモニー管弦楽団により、ヨゼフィーネへの哀悼の意が表され（第3楽章）、ソリストと合唱団が加わって人類の恒久平和への希望と目標が高らかに歌い上げられた。

前橋汀子さんがバイオリンソナタ第7番作品30―2ハ短調を演奏したのは特筆に値する。この曲は、初恋のエレオノーレが親友のウエーゲラーと結婚した衝撃を爆発させた作品で、年齢を超越してダイナミックに、劇的に演奏して大きな感動を与えた！

ここで、ベートーベンが多くの傑作を創造する起点を紹介したい。彼は、8年間ピアノを指導したエレオノーレと彼女の母との交流の情景を、ピアノ三重奏曲第1～3番作品1に描いて感謝の意を表し、音楽人生の出発点にする（1795年10月完成）。くしくも、この作品はヨゼフィーネが初めてレッスンを18日間（99年5月）、連日受ける作品になる。

ベートーベンは1800年以降、次第にヨゼフィーネの巨大な渦に巻き込まれ、七転八倒しながら自身の体験をモチーフに、多くの傑作を創造して前人未到の世界を切り開き、私たちに生きる力と希望を与える。

（沖縄市、沖縄ベートーヴェン協会会長、76歳）